



ひらがなで書かれた聖書

神奈川県立文化資料館蔵

行と同船して米国に帰り、もう一度来日する。

バプテスト派の本格的な伝道は、一八七三(明治六)年二月、米国バプテスト宣教師同盟から派遣されたネサン・ブラウンのときに始まる。キリシタン禁制の高札が撤去される直前のことであった。明治五年(一八七二)、米国北部バプテスト大会は、自由伝道協会の事業を引き継ぎ、日本に宣教師を派遣することを決議し、ゴープル並びにネサン・ブラウンの兩名を指名した。彼らは夫人を同伴し、サンフランシスコを出発して一八七三(明治六)年二月七日、横浜に到着した。その本格的な活動については次節に記すことにしたい。

た。帰国後ハミルトン神学校(別科)に学んだ。そのかたわら、漂流民の仙太郎に教育をほどこし、上記の万延元年春、横浜に到着、ヘボンの住む神奈川成仏寺に入った。ゴープル夫妻と子供らは寺の境内に小家屋を作りそこに住むことになった。仙太郎は、ごく平凡な人間で、伝道の役に立たなかつた。ゴープルは文久二年(一八六二)横浜山手に移った。神奈川に上陸して五年後苦しい自給伝道生活のなかにあって、元治元年(一八六四)四福音書と使徒行伝とを訳したが、そのうち、明治四年(一八七二)に、『摩太福音書』を、伝道師ゴープル訳として、横浜で出版した。これは、日本で出版された最初の聖書であった。禁制下の出版であつたから、版木の作成を依頼するのに非常に苦労している。このゴープル訳は、ごく通俗を旨とし、庶民階級を目標とし、全部平仮名を使用し、しかも口語体であつた。彼はまた、さんびか集をも翻訳した。『摩太福音書』の出版後、同年十一月、岩倉遣外使節の一

## 二 外国人を対象とした教会

### プロテスタント教会

幕末の禁教下において、もっぱら在留外国人のために創設され、終始その性格を維持した教会に、ユニオン・チャーチとクライスト・チャーチとがある。ユニオン・チャーチの創立については、高谷道男『ブラウン書簡集』の一八六三年三月二日の書簡に、「最初の米国プロテスタント教会の設立」という見出しで、記されている。同年陽暦二月十八日に、教会組織の問題を討議する目的で、横浜の米国領事F・S・フィッシャー大佐の自宅で会合を開いた。そして、「この港においてキリスト教会を組織することは適当である」ということが、万場一致で可決された。教会成立の文書が作成され、それに署名したものは、それによって、米国・オランダ改革派教会関係の教会を組織することに同意したものとみなすということを表明した。これに、ブラウンら同派の人びとと、長老教会、組合教会、バプテスト教会、イギリス監督教会の会員たち、諸教派からなる信徒十三名の名が、書き加えられた。このうち一人は日本人仙太郎であった。二月二十三日、教会の役員を選ぶ目的で、別の会が開かれた。その席で、長老、執事が選ばれ、ブラウンに対しては、仮牧師になるよう要請がなされた。礼拝の場所としては、当分の間、米国領事館内の一室をあてようという申し出が、米国領事からなされた。三月の第一安息日には礼拝がそこでおこなわれ、米国人三十六人が出席した。午後は、神奈川成仏寺のブラウンの家で行われるように聖餐式がおこなわれた。列席者は二十五名であった。聖餐式(洗礼式とともに、すべての教会において最も重要視されている礼典)をおこなうまえに、選ばれた長老と執事は改革派教会の形式に従って、その職務を分掌し、そこで初めて教会組織が完了した。

この教会設立の動機は、次のようなことである。横浜港の米国人居住者のうち、プロテスタント諸教会に所属する教会員が当時十六〜十八名いた。この人たちは、ある程度、お互いに孤立しているので、このような教会が必要であった。それに、この居留地の商人たちのためにも、また、それらの人びとから大きい影響をうける異教徒日本人のためにも、信仰を維持しさらに宣教をすすめるために教会が必要とされたのである。横浜には、すでに英国教会があるけれど、不幸にも礼拝は極端に排他的なもので、米国市民がそこに出席することは不可能である。さらに、新しい教会をオランダ改革派教会にする理由は、居留地の大部分を構成するオランダ人の協力を得るためである。オランダ人は、教会を支えるために資金の授助をしたいと望んでいる。この小さい教会は、喜望峰以東の諸国に建てられた最初の米国の教会である。

この教会は明治五年（一八七二）になって正式に外国人だけの教会であるユニオン・チャーチとして成立した。その一方で、日本人の教会として、日本基督公会が創立された。ユニオン・チャーチの集会は、その後、あちらこちらを移動して続けられた。居留地六十八番（本町通り）の外国人演劇場ゲーター座を使用したこともあった。一八七五（明治八）年居留地百六十七番（現在 海岸教会のある場所）、に立派な会堂と牧師館とが建てられ、日本基督公会も、ユニオン・チャーチも、これを交互に、礼拝に、祈祷会に、伝道集会等に使用していた。この会堂は、改革派教会の資金と、ユニオン・チャーチとして幕末から献金されていたものと合わせて建設したものである。

つぎにクライスト・チャーチは、文久二年（一八六二）のころ、横浜居留英国人の同教派信徒が、教会堂建設基金として献金し、このとき、英国政府からも、ほぼ同額の補助金が出された。その資金により、旧居留地百一番並びに百五番のところに敷地を入手することができた。こうして、教会並びに牧師館が建設された。

その後、引き続いて、毎年、英国政府から幾分の補助金の給与をうけていた。しかし、一八七四（明治七）年、英国政府か

らの補助金の交付が中止された。翌七五年、新しく、クライスト・チャーチの名称で独立し、それ以後、この教会には、財政および教務に関する委員が、教会員中から選出されることになった。その後、教会堂が山手二百三十四番地に新設されるが、それは一九〇一（明治三十四）年のことである。

### 横浜天主堂

開国後、最初に建立されたカトリック教会堂は、横浜の聖心教会（Church of the Sacred Heart）である。この教会は、横浜居留外国人に宣教の目的をもって建立されたもので、その意味では「在留外国人を対象とする教会」に入れてよいものである。

安政六年（一八五九）、江戸に来たジラル神父は、翌万延元年（一八六〇）、住居を攘夷運動から安全な横浜居留地に移した。そして、フランス領事館の公務に従事するとともに、日本人の教師について日本語を学び、また、横浜在留外国人のために聖堂を建立しようとして寄附金の募集に奔走した。建立予定地は、フランス政府が、幕府より永代借地権を獲得していた横浜居留地八十番（現在 山下町本町通り）である。この万延元年（一八六〇）末、琉球から横浜に移ってきたフランス人宣教師ムニクウ神父が、聖堂の工事監督にあたった。こうして、木造の聖堂および宣教師館の建築工事は進み、翌文久元年十月九日（一八六一年十一月十一日）に落成した。そうして、同十二月十三日（一八六二年一月十二日）、献堂式を挙行した。それと同時に、この日をもって、幕府から在留外国人に対する布教の許可を得ている。

この日の儀式は盛大なもので、駐日フランス公使ドシェーン・ド・ベルクールをはじめ、フランスの陸海軍将校などが多数参列した。プロテスタントの日本人教会が、ひそやかに官憲の眼を気にしながら創立されたのと対照的である。

この天主堂を、人びとは耶穌寺とよんで、好奇心から見物に来る者が続々と集まってきた。みな、おとなしくフランス人宣教師の日本語説教をきき、キリスト教に関する質問をする者が、毎月、数百人に達したという。なかには、祈祷文を書いてもら

って、持ち帰るものもあった。そのため、文久二年一月二十日（一八六二年二月十八日）には、神奈川奉行が、教会堂で、福井藩の歩卒・商人農民など三十人を捕縛するという事件が起こった。

慶応二年（一八六六）の末、プチジャン神父は、香港で日本の教皇代理に任ぜられ、叙品式（叙階に同じ）をあげ、間もなく横浜にもどってきた。

このころ、聖心教会の宣教師は、仏和学校を横浜洲千町（現在 中区北仲通六丁目）に開き日本人にフランス語の教授をしていた。フランス語の教授については、多分にプロテスタント宣教師のおこなう英語教授と対抗する意識を抱いていたように思われる。

慶応三年九月九日、本教会堂主任司祭シラール神父が亡くなり、遺骸は聖堂内に葬った。明治元年四月、プチジャン司教は、横浜に本拠を定めた。一八七三（明治六）年二月二十四日、太政官布告をもって、キリシタン禁制の高札は、他の制札とともに撤去され、元町浅間坂付近（前田橋畔の高札場）に建てられてあった高札も撤去された。

この解禁にそなえて、プチジャン神父は、日本人神学生のために、横浜天主堂付設の神学校を開設した。これが「横浜天主堂学校」の起源である。明治四年（一八七二）のことであるが、明治五年ころからは、日本人への布教のために、漢文・文語体の教書（司教が前教区の聖職者または信徒に対し教導のために発する公的書簡）を出版しようとして、神学校付属の石版印刷所を開設した。ここで、同神父は、在清宣教師によって漢訳されていた『聖教理証』の和訳出版を試みたのである。

それは、長崎地方の旧キリシタンの後裔のみでなく、新しい地方に、儒教的教養をもつ知識層にカトリック布教が伸展するためには、キリシタンという歴史的陰影をさけるためにも、あまりにも特殊な、伝統的キリシタン術語を使用することは、望ましいことではなかった。プチジャン司教は、このことを早くも悟っていたのである。

本書は、横浜天主堂において、一八七三(明治〇)年に開版された。本書出版は、プチジャン司教の横浜滞在中に翻訳が完成し、石版刷を修得した信者三人を主として、十三名の協力によって出版されたと思われる。本書は、再版が、一八七六(明治九年)、三版が七九年に、そして四版が八二年に刊行された。四版は、内容に大改訂を加え、自由に日本事情や外教者の疑問・論難をとりあげて答えており、キリシタン伝統をもたない京浜地区の知識人への布教書として、明治初期の教会内外に迎えられるのである。

またプチジャン司教は、漢学的教養のうちにある京浜を中心とする新布教地に対するカテキズム(教理問答)として、一八七五(明治八)年、キリシタン伝統術語主義から脱して、漢書系の『聖教初学要理』を出版した。そして、翌年には、同司教の献策によって、日本教会は南北両教区に分割されたが、横浜に司教座をおく北緯聖会は、一八七七(明治十)年以來、右の書を幾分改訂しながら連年のように出版した(海老沢有道「キリシタン典籍研究余録」『聖心女子大学論叢三』所収)。

### サン・モール修道会

わが国に初めて修道院と孤児院を創立したのは、フランスのサン・モール修道会である。明治五年(一八七二)、シンガポールにあるサン・モール修道院長のサン・マチルドは、五名の修道女を引率して横浜港に到着した。陽曆六月二十八日のことである。それは横浜に上陸した最初のカトリック修道女であった。そして、同年秋ごろ、山手五十八番(現在 横浜雙葉のテニスコートの地)に小さい家を借りて、「仁慈堂」と名づけ、孤児や捨子の世話を始めた。これが横浜における最初の社会事業施設であった。そして、翌一八七三(明治〇)年三月十四日には、はじめて日本人のための布教の許可を得たのである。

サン・モール修道院の起源は、延宝六年(二六七八)ごろのことで、パリのサン・モール街に修道女養成を目的とする一つの修道院が設立されたことに発している。サン・マチルドは、明治五年(一八七二)のはじめ、プチジャン司教から近いうちに日

本でキリシタンの禁制が解除される見込みがあるので、いそいで修道女派遣の準備をしてほしいという連絡をうけた。そこで、マチルドは、パリ本部から修道女を日本に派遣することの承認を得て横浜に来たのである。プチジャン司教は、横浜に孤児・棄児が、うろついている有様を、マチルドに説明した。実際、明治二年（一八六九）の米価騰貴により、貧民の窮迫がはなはだしく、神奈川県では、明治二年（一八六九）十月、吉田新田八丁繩手に、かゆ炊き出し小屋を設けて、横浜周辺の窮民に施粥（せがゆ）を実施している。しかし、それに集まる窮民は絶えることなく、翌年に入っても炊き出し小屋を閉鎖できなかったほどであった。そして、彼らは、その子女を人買いに売るほかに有様であった。政府は、明治四年（一八七一）六月「棄児養育米給与方」という棄児・孤児などの救済規則を布告した。それくらいに棄児・孤児が多かった。マチルドは、不幸な子どもを救済することが、自分に課せられた仕事であると決意し、ここに「仁慈堂」の開設となったのである。

マチルドら修道女の奉仕によって、横浜で唯一の児童保護施設であるこの仁慈堂では、要保護児童が増加していった。収容児童には、さきの「棄児養育米給与方」によって、給与米が支給されたが、それだけでは、多数の児童を養育するのは、とても困難であった。それで、マチルドは、内外の協力者に援助を求めたのである。

その後、さらに、マチルドは、山手八十八番地に、サン・モール・スクール（外国人子女の教育のため）と横浜葦女学校（貧児教育・養育のため）との二施設を設立した。後者は仁慈堂にかわる施設であった。一八七五（明治八）年八月、マチルドは、東京にも、サン・モール・スクール、葦女学校、女子語学校を設立した。そのころまでに、横浜葦女学校が扱った児童数は、児童三百五十人、乳幼児八十人、嬰兒（こども）里子二百五十人に達したといわれる。当時としては、非常に大きな数字であったといえる。

葦女学校の児童増加につれて、資金の調達と職員（せんぎん）の養成に力をいれる必要があった。ことに、日本人修道女を養成することが、マチルドの念願であった。そのような事情のなかから、日本人修道女マルグリット（姓は山上）が生まれた。この葦女学

校は、一九二二（大正十一年）九月一日の関東大震災によって潰滅したので、数人の生き残り児童を東京董女学校に移し、横浜董女学校は閉鎖するにいたった。

#### 横須賀天主公会

この教会は、慶応二年（一八六六）、幕府の横須賀製鉄所を建設するために来日したフランス人技術者のために、フランス人官舎とともに建設されたものである。横須賀製鉄所の首長として来日したウエルニは、慶応二年（一八六六）四月二十五日に横浜に到着し、ついで横須賀に赴いている。

製鉄所に招聘を予定した技術者は、首長ウエルニ以下、頭職人十一人、職人二十四人（二十六人か？）であったが、彼らフランス人技術者のために宿舎が建てられ、「小さな居留地」がつくられたのである。このフランス村は、「小奇麗でハイカラで礼拝堂もあり宣教師も居り正に吾等の同国人に愧ぢざる生活を営んでいる」と記されている。その宣教師とは、フェウレ神父である。また天主堂は、学校としても利用され、その広さは、八十坪余り、経費は二千六百五両余りであった。慶応三年（一八六七年）春、伝習生の増補とともに職工生徒を募集し、その生徒らにフランス語を教授していたのが、フェウレ神父であった。一八七四（明治七年）年に、パリ外国宣教会から横須賀天主公会主任司祭としてデマンジュール司祭が赴任した。このときすでに洗礼をうけた信者が三人以上いたという。この一八七四年から一九〇七（明治四十）年までの三十三年間に受洗者は百八十八人である。一八八六年には、信仰堅固の象徴として堅信の秘蹟を、オズーフ司教より受けた信者は五人あった。一九〇七年、ゲラン司祭がデマンジュール司祭に代わり、一九〇九年レイ司祭、一九二二（大正元年）年ジランディア司祭が赴任した。大正年間、横浜教区に属し、多くの信者がいた。



### 第三節 開化の文物

#### 一 日刊新聞の誕生

##### 『横浜毎日』の発刊

わが国における最初の日刊新聞として『横浜毎日新聞』が、明治三年十二月八日（一八七一年一月二十八日）に発刊された。発行所は、元弁天町（現在 中区北仲通二丁目）の英仏語学所に開設された横浜活版社である。ところで『横浜毎日新聞』は、創刊当初の紙面が久しく発見されなかったために、その創刊日について、従来さまざまな説がとなえられていた。あるいは明治四年四月発刊といい、あるいは明治三年十二月十二日に『横浜新聞』として片面刷りで発刊、四年四月十五日に『横浜毎日新聞』と改題した、という。こうした諸説に対して、日付の綿密な計算により、十二月八日発刊を提唱する新説（近盛晴嘉）があらわれたが、現物が確認されない限り、推測にとどまった。

ところが一九六四（昭和三十九）年に至り、群馬県高山村の旧家（佐藤家）から、十二月八日付の創刊号が発見されたのである。発刊の日付は、こうして確定した。新聞は、大阪の西洋紙を用い、両面に鉛活字をもって印刷していた。鉛活字が不足したところは、木版活字をもって補充している。すなわち第一号から、今日の新聞と同じような体裁をもっていたのであった。しかし日刊といっても、最初から毎日、発行したわけではない。第一号の冒頭には、全段を通して創刊の辞を掲げ、その最

# 横濱毎日新聞

明治三年十二月八日 第三三三三號

<p>本紙の宗旨は、新聞の發行者として、國民の進歩を期し、其の利益を謀るに在り。其の宗旨は、新聞の發行者として、國民の進歩を期し、其の利益を謀るに在り。</p>	<p>本紙の宗旨は、新聞の發行者として、國民の進歩を期し、其の利益を謀るに在り。其の宗旨は、新聞の發行者として、國民の進歩を期し、其の利益を謀るに在り。</p>
--	--

後に「当十二日より毎日摺出す」と記している。つづいて社告ともいべき「新聞告白」を掲げ、そのなかで休日、正月松の内（一月一日―七日）・五節句・氏神まつり・毎月朔望（二日と十五日）とするが、そのほかは「毎夕摺立、翌朝売出し可申候」と述べていた。

こうした記事によって見れば、新聞は十二月八日に第一号を発売した後、数日を休んで、第二号を十二日に印刷、十三日に発行、以後は休日のほか日刊として発行をつづけた、と推定される（近盛説による）。なお四年一月一日には第十八号を発行、つぎは七日まで休んで、第十九号は八日に印刷し、九日に発行したと考えられよう。

いま発刊の地の跡には、国立横浜生糸検査所が建てられている。その構内に一九六二年十月十日、「日刊新聞発祥の地」

<p>十二月八日 西運上所入</p> <p>十二月七日 西運上所入</p>	<p>十二月八日 西運上所入</p> <p>十二月七日 西運上所入</p>
---------------------------------------	---------------------------------------

『横濱毎日新聞』第1号上段表、下段裏 (明治3年12月8日付) 国立国会図書館蔵



「日刊新聞発祥の地」記念碑 (横浜市中区北仲通)

せたのであった。

発行元の横浜活版所においては、やがて社勢を伸張するため、横浜の豪商であった原善三郎、茂木惣兵衛、吉田幸兵衛らの協力によって業務を拡充し、島田豊寛を社長に迎えた。この島田の養子が三郎であり、のち『横浜毎日』の後身である『毎日

記念碑が除幕された。碑文には、この地で『横浜毎日新聞』が誕生したことを告げるとともに、同紙が「冊子型木版刷りの旧型から、活字一枚刷りの現代型へと踏切った我が国最初の新聞」であったことを明記している。ただし発刊の日付は旧説にしたがって、十二月十二日とした。

さらに碑面には『横浜毎日新聞』第二十九号の紙面を原寸大に複製し、金版ではめこまれた。当時は第二十九号が、現存する最古の新聞だったからである。この第二十九号は明治四年一月二十日発行であり、さきの計算によれば日付と号数はぴったり符合している。

#### 『横浜毎日』の発展

当時の神奈川県知事井関盛長は内外の事情を報道する媒体として、新聞を発刊したいと考えていた。たまたま長崎のオランダ通訳本木昌造が鉛活字の製造に成功したことを聞き、本木の助力を求めた。よって本木は、門人の陽其二に活字および印字機を持たせ、上原鶴寿とともに横浜へ向かわせた。井関は、かつて横浜に輸入する外国圖書の検閲官であった子安峻を招き、子安を編集人として『横浜毎日新聞』を発刊さ